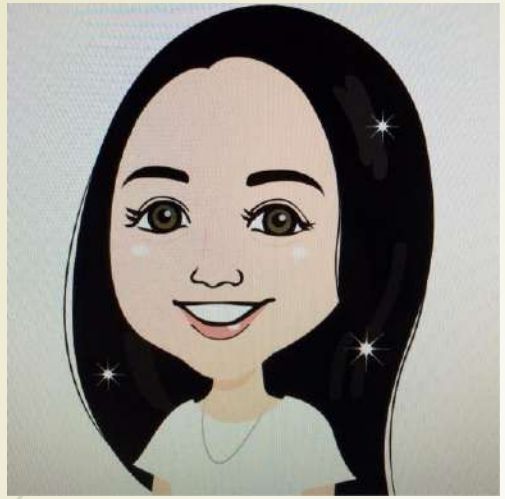


李　仁子　Lee Inja

- 専門領域：教育人類学
- 担当科目：教育学概論（現代教育学の課題）
  教育調査法（教育学におけるフィールドワーク）
  教育学実習（人間形成に関わる文化人類学的フィールドワークの実習）
  比較人間形成論演習（東アジアの教育）
- 研究キーワード：災害人類学、多文化教育、人の移動と文化

フィールドワーク（研究室の共同調査）
稲作：石巻市河北町三反走

2019年4月より
石巻市農事組合ビックベリーランドパートナーシップの方々にお世話になっております。
コロナ禍の中、必要なところにコメを分けました。

我々の稲作の先生、佐々木文彦さん

収穫の作業中の住民と研究室の学生たち
（2019年10月17日）

東日本大震災被災地での調査

大津波で被害を受けた石巻市大川地区の住民との交流

避難所　→　仮設住宅　→　復興住宅（９年間継続の交流）

地域づくりへ第一歩

石巻・二子団地住民「顔合わせ会」

今後の活動に活発意見

和やかな雰囲気の中で行われた初の顔合わせ会

石巻市の防災集団移転団地・二子団地住民の「顔合わせ会」が先日、小船越の交流施設「川の上・百俵館」で初めて開かれた。和やかな雰囲気の中、参加者たちは活発に意見を交わし、地域づくりの一歩を踏み出した。会は、二子団地会、河北総合支所、東北大大学院教育学研究科李仁子准教授の研究室による協議の上、開催された。今後、住民主導で継続的に会を開催していく。

顔合わせ会は午前と午後に開き、合わせて20人ほどが参加し、藤村充会長(60)が進行役を務めた。住民たちは漬物やお茶菓子を持ち寄り「団地開きをどうするか」「親睦行事について」「寺・神社について」など5項目を議題に話し合った。

復興団地はイベントの開催が少なく、仮設住宅と比べ近所付き合いが疎遠―という指摘があり、ぜひ開きたい行事として、運動会やカラオケ大会、芋煮会などのアイデアが出され、活発な活動にしていくことを確認した。

同団地に引っ越して2週間後に1人が亡くなったことから、「孤独死をさせないという意識を持つことが大事」と隣近所を気遣う声や、「体調不良」を象徴する旗を家の前に掲げて近所に知らせる―ことなどの意見もあった。

7班班長の高橋節男さん(67)は、負担にならないような班長の回し方を提案し、賛同を得た。会の最後に、6班班長の山本和彦さん(65)は「きょう顔と名前を覚えましたので、今度声を掛けますね」と話し、場を盛り上げた。

李研究室の大学院生7人と河北総合支所職員1人も参加し、議論の進行役を担った。大学院生の上之郷菜穂さん(25)は「顔合わせが、震災被災者の新たな集落づくりの第一歩であることを教えられた」と語った。

25人が参加し、意見交換しながら交流を深めた。

初めに、藤村充会長(60)が「前回、顔合わせを通して住民同士がコミュニケーションを取れるようになった。今回もそのような会にしたい」とあいさつ。

和やかな雰囲気の中、集会所での親睦行事、寺・神社について、班長をどう回すか―などを議題に意見を交わした。

この中で、「盆踊りの曲を聴くと、心が安らぐ」「子どもや若者たちとお年寄りの交流の場として楽しめる。高齢者も昔を思い出していい」など、来年の開催を望む声が多かった。

2班の三條信幸班長(67)は「皆さんと一緒に街づくりをしてきたい」と抱負を述べ、4班の浜畑国明さん(70)は「若い世代が活躍できる団地にしていきたい」と話していた。

今回も東北大大学院教育学研究科の李仁子准教授の研究室の学生や市役所職員も参加し、議論の進行役を務めた。

石巻

来年、盆踊りやろう

二子団地住民、交流へ意見

石巻市の防災集団移転団地・二子団地住民の「顔合わせ会」が26日、団地近くの交流施設「川の上・百俵館」で開かれた。7月の6、7班に次いで2、4班から22世帯、

町づくりや行事などについて意見を交わした顔合わせ会

復興団地である二子団地での住民顔合わせ主催
（住民の生の声を引き出すためのフィールドワークの一環）

石巻かほく 2018年7月28日 左、2018年8月28日 右

東日本大震災被災地での調査

大津波で被害を受けた石巻市大川地区の住民との交流

避難所　→　仮設住宅　→　復興住宅（９年間継続の交流）

頑張ろう石巻
3・11東日本大震災

石巻

神楽や消防団で意見

二子団地住民、顔合わせ会

石巻市の防災集団移転団地・二子団地住民の「顔合わせ会」が17日、団地近くの交流施設「川の上・百俵館」で開かれた。

前回の2班、4班に次いで午前は3班12世帯15人、午後は5班9世帯9人が参加。和やかな雰囲気の中、安心して暮らせる地域づくりなどについて意見を交わした。

話し合いでは「寺・神社をどうするか」「親睦行事について」「班長をどう回すか」など、これまでの顔合わせ会でも出た議題に加え、神楽や消防団をどうするかについても意見を出し合った。

このうち、消防団については、高齢者が多いことや日中勤めているため、団に参加することは難しいーといった課題が挙がった。

生活で困っていることなどについても話し合った。

「集会所もできていないのに、何に使うか分からない」と、町内会費徴収に疑問の声もあったが、「何かあってからでは遅いので、少しずつ皆さんで負担し合いましょう」との班長の説明に理解を示していた。

今回も東北大大学院教育学研究科の李仁子准教授の研究室の学生や市役所職員も参加し、議論の進行役を務めた。

安心して暮らせる地域づくりについて話し合った顔合わせ会

石巻・二子団地東町内会

地域課題を意見交換

全7班顔合わせ会終了

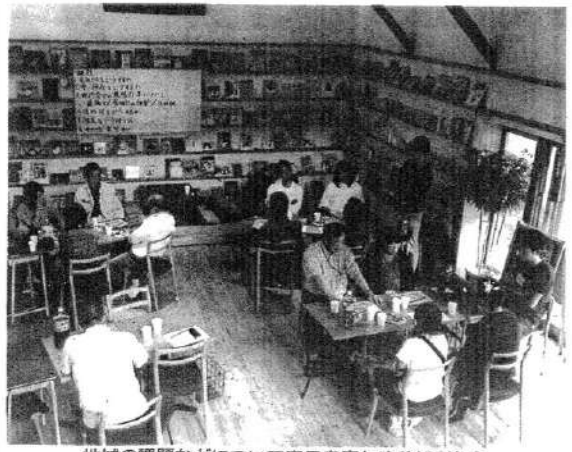
東日本大震災の防災集団移転団地である石巻市二子団地東町内会の住民顔合わせ会が8日、団地近くの同市小船越の交流施設「川の上・百俵館」で開かれ、行事や消防団組織などについて意見を交わした。

団地内に三つある町内会のうち、旧河北町民が多く暮らす東町内会では、7月から班ごとに顔合わせ会を実施。4回目の今回は1班の10世帯が参加し、自己紹介をした後に課題を話し合った。

交流行事として3町内会合同で盆踊りやバーベキューをしたいという提案があった一方、これまで各地域で行ってきた祭については移転前の住民中心に行うべきだとの意見もあった。消防団の立ち上げや、班長の任期などについても話し合った。

東町内会は今回で7班全ての顔合わせ会が終了し、これまで出た意見を運営に生かしていく。藤村充町内会長(60)は「古里のいいところはそのままに、新しい物を取り入れ、みんなでまちと歴史を作っていけたらいい」と話した。

顔合わせ会は、震災後から河北地区に通う東北大大学院教育学研究科の李仁子准教授や研究室の学生、市職員がサポートした。今後、雄勝地区の住民が多く暮らす南と西両町内会でも同様の会を開いていく。



地域の課題などについて意見を交わす参加者たち

復興団地である二子団地での住民顔合わせ主催
（住民の生の声を引き出すためのフィールドワークの一環）

石巻かほく 2018年9月23日 左、2018年10月13日 右

フィールドワーク（研究室の共同調査）
韓国永同の調査（シルム編）上之郷奈穂
2019/12/11～12/16

調査メンバー
上之郷奈穂（D2)
井上千晴（学部3年）
清川雅文（学部3年）

韓国シルムのアマチュアの王者を決める大会（女性も競う）

インタービューの風景
（現地の通訳の沈仁姫さんと撮影の清川くん、井上さん）

男子優勝者へのインタービュー
（授賞式前の正装姿）

女子優勝者へのインタービュー
（授賞式前の正装姿）

韓国永同での調査を終え、ソウルの夜を楽しむ

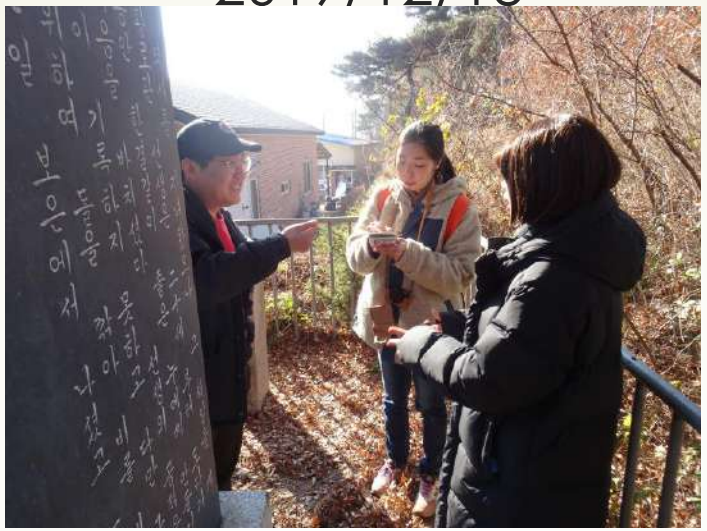
喜び合う再会
（言葉も文化も知らない全くの未知のところで、リーダーシップをとって無事調査を終えた団長と指導教員のソウルでの再会）

フィールドワーク（研究室の共同調査）

韓国永同の調査（養蚕編）井上千晴

2019/12/13

報恩養蚕協同組合での聞き取り風景
（劉さん親子：右上）



地域の養蚕の起源を記念する石碑
を調査

黄色の糸を吐く蚕がつくった珍しい繭を
見せてもらう。韓国オリジナルの品種。

お昼に韓牛の焼き肉をご馳走になる。
蚕のサナギも食卓に。

地域で１番大規模な養蚕農家を訪問

別れ際に記念撮影
劉さん親子（左）、イさんご夫妻（中央）、
通訳：李ヘスさん（右から3人目）

フィールドワーク（研究室の共同調査）

韓国永同の調査（書芸編）清川雅文

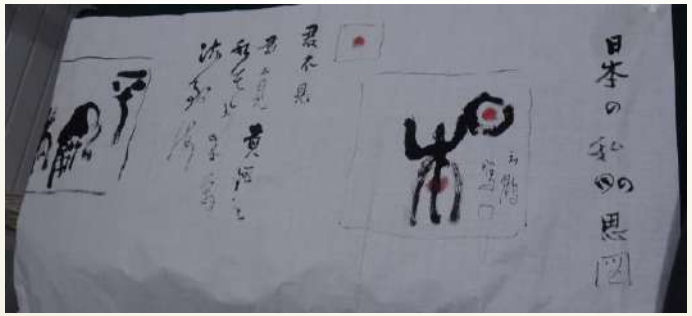
2019/12/13

記念撮影（書道家の朴慶東先生、現地通訳の李ヘスさん）

聞き取り調査の様子（資料を使って説明して頂いている）

調査を終えて帰路につく

調査を終えて先生とお別れ



目の前で書いていただいた「日本」と「平和」の字

通訳さんおすすめのカフェで調査の振り返り

フィールドワーク（研究室の共同調査）

韓国浦項の調査（震災編）小西賢

2019/12/11～12/16

ソウル駅から浦項へ出発
通訳の申ジェグァンさん
記録の細谷勇介くん

インタビューの風景

都市再生町づくり課との日韓の
災害対応に関する情報交換会

フンヘ小学校仮設校舎でインタビュー。

フンヘ室内体育館（避難所）での
インタビューと被災者グループの
集会の調査

【情報交換会後の記念撮影】調査メンバー
李仁子先生（下段左２番目）
小西賢（D2、下段右１番目）
細谷勇介（学部3年、上段左１番目））

フィールドワーク（研究室の共同調査）

韓国浦項の調査（被災状況編）細谷勇介

2019/12/11～12/16

フンヘ小学校校舎　フェンスの向こうにがれきが残されたままになっている

地震で傾いてしまったマンション　ところどころコンクリートが崩れている

避難所になったフンヘ室内体育館　入ってすぐのラウンジには炊出しや弁当が

仮設住宅群　一軒一軒塀で囲われている

東北韓国学フォーラム

- 本フォーラムは韓国学中央研究院の2019年海外韓国学発展事業の支援により始まった事業です。
- 本フォーラムの研究では、東北地域の在日コリアン等少数集団の災害研究をはじめ、歴史・宗教・社会文化学など幅広い韓国学研究を目指しています。
- Home page
  - https://www.tohoku-ks.net/

韓国学 東北から発信

東北における韓国関連研究の発展につなげようと、東北大大学院教育学研究科に「東北韓国学セミナー」が新たに開設された。日韓の歴史、文化など長年の研究成果を生かしながら、東日本大震災後の在日コリアンの調査なども盛り込み、幅広い領域の研究者の交流、若手研究者の育成を目指す。

韓国研究に携わる大学内外の研究者や学生らが参加した第1回セミナー＝仙台市の東北大川内南キャンパス

東北大院・セミナー新設

研究者の育成、交流狙う

第1回セミナーは10月25日、東北大川内南キャンパスであり、東北大の山口昌弘副学長、文化人類学者の伊藤亜人東大名誉教授ら研究者や学生約50人が出席。朴容民・駐仙台韓国総領事も参加した。

東北大の嶋陸奥彦名誉教授は「秋収記にみる韓国農村の姿」と題して基調講演。1897年から1962年に記録された小作人の史料から韓国の農村文化を読み解いたほか、農業における日韓交流についても解説した。

また、36～39年に東北帝大（現東北大）で学んだ詩人金起林（キムギリム）にちなんだ奨学金が3人に授与された。シルム（韓国相撲）が研究テーマの教育学研究科2年上之郷奈穂さん(26)は「これまで研究してきた日本の大相撲から、韓国や東アジア全体に視野を広げて研究に励みたい」と抱負を語った。

セミナーは韓国の財団法人韓国学中央研究院の助成事業（3年間）で、一般公開のセミナーを年4回、若手のワークショップを年2回、学術大会を年1回予定する。

代表を務める教育学研究科の李仁子准教授は「東北大には70年に及ぶ韓国学の歴史が蓄積されている。首都圏中心ではない、震災など地域の経験も生かした研究を幅広く展開していきたい」と話す。第2回は19日に開く。

2019年11月7日　河北新報社

近年の卒業論文題目（一部）

- 青ヶ島村の教育ー教員の児童観を中心にー
- シュタイナー教育に関する一考察
- 相撲部屋と力士の教育に関する研究
- 田代島の人々の暮らしと民話に関する研究
- 伝統品の問屋街変遷と展望に関する考察　ー松屋町の人形店を事例として－
- 地域日本語教育の果たす機能・役割に関する考察
- 移民１．５世の移住先での生き方の模索に関する文化人類学的研究
  ーニュージーランドにおけるインドネシア人の教会活動を事例に

近年の修士論文題目（一部）

- 災害観の変遷と文化的背景に関する考察ー東日本大震災で被災した宮城県沿岸地域を事例にー
- 脆弱者の福祉的な意味を持つ学習支援に関する考察
- 東日本大震災におけるコミュニティの再生の歩みと「契約講」ー宮城県南三陸町を事例にー
- 「学区房」から見る中国の義務教育の格差化
- 延辺朝鮮族留守児童の教育問題に関する研究　ー延吉市の例を中心にしてー
- 中国大都市における農民工子女の教育問題に関する考察　ー遼寧省大連市を事例にー